

英語教育における動詞の意味素性指導

— 貸借関係表現に焦点を当てて —

井上逸兵・松原健二

第1章 はじめに

複数の人間とモノが存在する時、そこには往々にしてモノの授受や貸借関係が生ずる。このようなモノの授受や貸借の関係は、人類の誕生とほぼ時を同じくして成立し、人類の歴史と共に現在にまで続いているものと思われる。現代における貸借関係は、金銭を介さない単なるモノのやり取りであることもあれば、金銭の授受が伴う商取引である場合もある。前者の場合には、家族や友人などといった比較的親しい間柄の人間間で行われることが多く、後者の場合には、ビジネスのひとつとして当事者間の親密度に関係なく行われることが多い。

しかし金銭介在の有無を問わず、このようなモノの貸借関係は人類にあまねく共通したものと考えられ、行為そのものは「モノのやり取り」という極めて単純なもので、文化的な要因に影響を受けることも少ないものと考えられる。しかし、それらの行為を表現する際には、言語によって興味深い差異の認められることがある。

本稿では貸借関係表現に焦点を当て、日本語の「貸す」や「借りる」に相当するものが、英語ではどのように表現されるのかを検証していくことにしたい。特に英語において「貸す」や「借りる」を意味する動詞が、どのような意味的特性を有し、どのような意味素性を持つのかを中心に考察を進めていく。

第2章 貸借を表す表現の分類

本章では、モノの貸し借りをめぐる表現を見ていくことにする。まず、日常生活の上で身近な内容の文例を使って見ていくことにしよう。なお以下の論考においては、モノを貸す側の意味を表すものを「GIVE 素性」、借りる側の意味を表すものを「GIVEN 素性」と便宜上呼ぶことにする。

(1) Can I borrow your bicycle?

(あなたの自転車をお借りできますか。)

(2) Yes, I'll lend you my bicycle.

(ええ、私の自転車をお貸ししましょう。)

例文(1)、(2)は一連の会話で、(2)は(1)の質問に対する返答となっている。英語の「borrow」は「借りる」こと、すなわち「GIVEN 素性」を、「lend」は「貸す」こと、すなわち「GIVE 素性」を意味する。したがってこれらの2語は、互いに対語であると言うことができる。一般

にお金を払わないでモノを借りる場合には英語では‘borrow’を使うが、次のような場合には‘borrow’を用いることができない。

(3) *I want to borrow your bathroom.

これは‘borrow’という語が本質的に「借りたモノを他の場所へ持って行くことを意味する」(松本, 1976) からであり, ‘bathroom’は常識的には移動できないものなので(3)は非文となる。このような場合には, ‘borrow’の代わりに‘use’を用いなければ「トイレをお借りしたい」という意味にはならない。それでは, 例文(4)はどうであろうか。

(4) (*)May I borrow your phone?

このような英文は以前は(3)と同様に非文だと言われていて, ‘borrow’の誤用例の典型的なものであった。電話機を持ち運びすることなど考えられなかったからである。しかし携帯電話が普及した現在, (4)における‘phone’を‘mobile phone’だと考えれば何ら問題はない英文ということになる。これは, ある言語表現が科学技術の進歩と社会状況の変化によって不適格な文から適格な文に変化した興味深い例である。

ところが, 社会状況の変化にかかわらず, 次の(5), (6)の英文はいずれも不適格な文である。

(5) *We borrowed skis from the ski rental shop.

(6) *They make money by lending their rowing boats to tourists.

これらの文が不適格なのは, 金銭が介在することが明らかな表現(‘the ski rental shop’や‘make money’)と, ‘borrow’あるいは‘lend’が共起しているからである。すなわち, ‘borrow’や‘lend’という単語は金銭を伴わずに無料で貸し借りする時のみ用いることのできる語で, その行為によって貸した側と借りた側との間に金銭の授受が行われる場合には用いることができない。そこで(5), (6)の英文を適格文にするためには, 動詞である‘borrow’や‘lend’を別の語に置き換えなければならない。次の例文(7), (8)は, それぞれ(5), (6)の英文が適格文になるよう書き換えたものである。

(7) We rented skis from the ski rental shop.

(私たちはレンタルスキーの店で, スキーを借りた。)

(8) They make money by renting their rowing boats to tourists.

(彼らは, 観光客にボートを貸してお金を稼いでいる。)

これらの例で明らかなように, 英語においては金銭の授受を伴う貸借行為に関しては‘rent’

という語をもって表現するするのが一般的である。したがって例文(1), (2)のような金銭を介さない貸借関係を'rent'を用いて表現するのは不適格である。

(9) ? Can I rent your bicycle?

(あなたの自転車をお借りしていいですか。)

(10) ? Yes, I'll rent you my bicycle.

(ええ、私の自転車をお貸ししましょう。)

これらの文は文法的には問題はないが、もし(9), (10)の会話が実際に交わされたとなると、この二人は自転車の貸し借りによって金銭を授受することを前提として会話をしていることになる。そうでなければ、これらの文は状況的に不適格な表現を持つ文ということになる。

さて、'rent'という語が金銭の授受を伴う貸借行為を表すことはこれまでに見てきた通りであるが、例文(7), (8)の日本語訳をよく見ると興味深いことに気づく。

(7-日本語訳) 私たちはレンタルスキーの店で、スキーを借りた。

(8-日本語訳) 彼らは、観光客にボートを貸してお金を稼いでいる。

すなわち、'rent'という語は「借りる」場合にも「貸す」場合にも用いられていて、[GIVE 素性] と [GIVEN 素性] の両方の意味素性を具備していることがわかる。金銭を介さない無料貸借の場合には、英語においても'borrow' [GIVEN 素性] と'lend' [GIVE 素性] という違う単語を用いて表現していたが、金銭が介在した有料の貸借関係になると、「借りる」も「貸す」も'rent'という一語で言い表している。¹⁾

このように、英語の場合には、無料貸借と有料貸借の間に明確な使用語彙区分が存在しているものの、有料貸借の場合には「借りる」と「貸す」が同一の語で表現されるという不思議な現象が存在する。無料貸借の場合には、「借りる」と「貸す」が異なる語で表現されているので、英語話者が「借りる」ことと「貸す」ことを同一の意味範疇でとらえていて、[GIVE 素性] と [GIVEN 素性] の区別がないとは考えられない。ここで'borrow', 'lend', 'rent'の3つの英語動詞と、「貸す」、「借りる」の2つの日本語動詞をその意味素性によって分類してみると、表1のように整理できる。

表1 英語/日本語の貸借関係を表す動詞の意味分類

意味素性	英 語	日 本 語	金 銭
[GIVEN 素性]	borrow	借りる	無 料
[GIVE 素性]	lend	貸 す	
[GIVEN 素性]	rent	借りる	有 料
[GIVE 素性]		貸 す	

表1を見ても、やはり英語の‘rent’が [GIVEN 素性] と [GIVE 素性] の両者を併せ持っていることは非常に奇異な感じがするのは否めない。そこで、次章では英語の‘rent’に焦点を当て、この語を用いた英文がどうして [GIVEN 素性] と [GIVE 素性] の両方を持ち得るのかを詳しく探っていくことにしたい。

第3章 ‘rent’の双方向性についての考察

前章で見たように、動詞‘rent’は [GIVEN 素性] と [GIVE 素性] の両者を併せ持つ語であると考えられる。言い換えれば、貸借関係における意味的な双方向性を持つ語であると言うことができる。ここで、‘rent’が用いられた例文を再度検討してみることにする。

(7) We rented skis from the ski rental shop.

(私たちはレンタルスキーの店で、スキーを借りた。)

(8) They make money by renting their rowing boats to tourists.

(彼らは、観光客にボートを貸してお金を稼いでいる。)

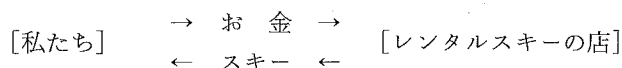
動詞‘rent’が [GIVEN 素性] と [GIVE 素性] の双方向性を持つゆえに、上記の例文(7), (8)はいずれも文法的で適格な英文になっているものと考えられる。しかし、動詞が双方向性を持つということは、方向性の識別、換言すれば [GIVEN 素性] であるか [GIVE 素性] であるかということを見分ける標識となっているものは動詞ではないということになる。それでは方向性の標識の役割を担っているのは何かと言うと、それは(7)では‘from the ski rental shop’, (8)では‘to tourists’であり、いずれも前置詞句である。前置詞句が [GIVEN 素性] か [GIVE 素性] かという方向性を表示してくれることによって、その文意が「借りる」か「貸す」かがわかるということになる。

それでは動詞‘rent’が担っている意味役割は、単なる「金銭を伴う貸借関係」ということになる。これまで動詞‘rent’には貸借関係の双方向性があるかのように述べてきたが、実は方向性はこの場合前置詞句によって決定されているのであり、‘rent’自体には方向性がないと言う方が正しいものと考えられる。すなわち、動詞‘rent’は [GIVEN 素性] と [GIVE 素性] の双方向性を持つのではなく、そのどちらをも具備していないということである。

それでは、金銭の介在しない貸借関係の場合には方向性の明確な‘borrow’ [GIVEN 素性] および‘lend’ [GIVE 素性] という語を用いる同じ英語において、金銭の介在する‘rent’の場合にはどうして方向性がない意味素性になってしまうのであろうか。金銭介在の有無は、これらの動詞の意味素性にどのように影響を与えているのであろうか。

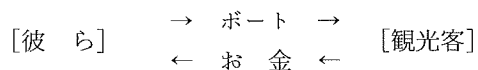
ここで原点に立ち戻り、そもそも金銭の介在する貸借関係とはどのようなことなのか、ということを考えてみたい。先の例文(7)と(8)を用いて考察を進めてみよう。

例文(7)においては、[私たち] はお金を払い、[レンタルスキーの店] からスキーを借りる。両者の間には、お金とスキーが行き交うことになる。これを簡単に図式化すると次のようになる。



すると、[私たち]はこの商取引において「スキー」を一時的に手にすることができ、[レンタルスキーの店]は「お金」を得ることになる。

また例文(8)においては、[彼ら]は「お金」を得、[観光客]は「ボート」を一時的に使うことができる。これを図式化すると次のようになる。



売買関係とは違い、貸借関係は「スキー」なり「ボート」なりのモノの移動が一時的ではあるが、モノの所有権が移動していることに変わりはない。そのような意味で、金銭を介在する貸借関係は基本的に等価交換の関係であると言うことができる。これを貨幣経済の通念を離れて物々交換の通念で考えてみると、これらの貸借関係が基本的に等価交換の関係であることが一層明らかとなる。すなわち金銭の介在する場合には、その貸借関係は本質的な意味で物々交換に近い等価交換であり、それは上の矢印が双方向に印されていることから裏付けられる。²⁾

さて、それでは金銭の介在しない貸借関係はどのようになるかということを再び例文(1)、(2)を使って考えてみたい。

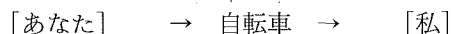
(1) Can I borrow your bicycle?

(あなたの自転車をお借りできますか。)

(2) Yes, I'll lend you my bicycle.

(ええ、私の自転車をお貸ししましょう。)

例文(1)、(2)の貸借関係を図式化すると、次のようになる。



このように、金銭の介在しない貸借関係は一方通行であり、それだけに矢印の方向の持つ意味は大きい。金銭の介在する場合と比較すると、その方向性の持つ意味は格段に大きいということが言える。すなわち、'rent'の用いられる文脈においては、金銭の介在する貸借関係であることを明示すればその方向性は利害関係においてさほど大きな意味を持つとは言えず、それゆえに動詞'rent'に方向素性が付加されていないものと考えることができる。

第4章 カネの貸借についての考察

これまではモノの貸借について考察を進めてきたが、考えてみると貸し借りするのは何もモノに限ったことではない。貨幣経済社会においてはカネの貸借も立派に存在している。そしてカネの貸し借りにおいても、利息という金銭が介在する場合と介在しない場合がある。

前章までの考察で、英語では金銭が介在する場合には‘rent’という語を用いることを見てきたが、興味深いことにカネの貸し借りにおいては、利息を取る場合にも‘borrow’や‘lend’という語を用いるのである。それでは、例文を使って英語でのカネの貸借表現を見ていくことにしよう。

(9) I borrowed a lot of money from the bank when I bought a house.

(家を買う時に、私は銀行から多額の借金をした。)

(10) The bank lent me a lot of money (on interest) when I bought a house.

(私がお家を買う時に、銀行は私に多額の金を(利息付で)貸してくれた。)

例文(9)、(10)においては、カネの貸手として「銀行」が登場しているので、これらの文が利息を取ってカネを貸している商取引を意味していることは明白である。特に(10)において、‘on interest’を明示すればなおさらである。しかし、例文(9)を次のように書き換えた場合にはどうであろうか。

(11) I borrowed a lot of money from my brother when I bought a house.

(家を買う時に、私は兄から多額の借金をした。)

例文(11)の英文が利息を伴う貸借関係であるかどうかは、英文を見る限りでは曖昧である。(11)の英文は、どちらにも解釈可能である。例文(9)との違いは貸手である‘the bank’と‘my brother’の違いだけであり、この部分に位置する語が商取引を意味するかどうかを明確に示せない場合には、例文(11)のように利息の介在は判別できない。この事実、動詞である‘borrow’には「利息を取るかどうか」ということの識別に与する意味素性が含まれていないことを意味している。また、例文(10)の主語を入れ換えてできる(12)についても、‘on interest’を明示しなければ状況は同じである。

(12) My brother lent me a lot of money when I bought a house.

(私がお家を買う時に、兄は私に多額の金を貸してくれた。)

この英文においても、利息の介在は曖昧である。したがって、‘lend’も‘borrow’と同じく、利息に関する意味素性は含まれていないことがわかる。

このようなカネの貸借の場合には、‘borrow’や‘lend’という動詞自体は、モノの貸借の場合と同様に金銭の介在する貸借関係を表している訳ではない。しかし、それではなぜ利息という金銭の介在する商取引においても‘borrow’や‘lend’という動詞が用いられ、‘rent’が使われないのであろうか。

この問題を解き明かすために、ここで再び図式を使って考えてみよう。例文(9)、(10)の貸借関係、および例文(11)、(12)の貸借関係は、次のように図式化することができる。

(9)および(10)

[銀行]	→ 多額の金 →	[私]
	← 利 息 ←	

(11)および(12)

[兄]	→ 多額の金 →	[私]
	(← 利 息 ←)	

ここで第3章での‘rent’についての考察を振り返ってみると、‘rent’の用いられる文脈では、貸借関係は基本的に等価交換の関係であった。しかしながら、同じく金銭の介在する貸借関係であっても、カネの貸し借りの場合には利息は貸出金（借入金）に比べて格段に低い金額であり、とても等価交換の貸借関係であるとは言えない。そのために、本質的に等価交換を意味する‘rent’は用いることができない訳であり、等価交換でないゆえにたとえ利息が介在しようとも‘borrow’や‘lend’という動詞が用いられることになる。³⁾

もともと無料で貸借を表すのが原義であるはずの‘borrow’や‘lend’を、利息の伴う場合にも用いることに不自然さを感じる英語学習者もいるが、ほぼ一方的な貸借の流れであるという意味では、‘rent’よりもむしろ‘borrow’や‘lend’を使う方が論理的であり、言語的な整合性もあると言える。

第5章 結 び

本稿では、貸借にかかわる英語表現を分析してきたが、‘borrow’、‘lend’、‘rent’などの貸借を表す基本的な動詞についてその意味素性を明らかにできたと考えている。

実際の英語学習の場では、これらの動詞の用法に混乱を覚える学習者も多いように見受けられるが、それは次のような理由によるものと思われる。

- (1)‘lend’と‘rent’が発音の上で似ており、‘l’音と‘r’音の区別が曖昧な学習者にはまぎらわしいこと。
- (2)‘lend’が不規則動詞で‘lend>lent>lent’と変化するために、過去形および過去分詞形が発音の上で‘rent’に近く、音声的な識別が難しいこと。
- (3)‘rent’が「貸す」意味に用いられたり、「借りる」意味に用いられたりして、その意味素性上の方向性が単語レベルでは把握できないこと。
- (4)有料の貸借には‘rent’が用いられるという原則があるのに、金銭の貸し借りについては利息を取る場合でも‘rent’ではなく、‘borrow’や‘lend’が用いられること。

以上のように列挙すると、貸借関係の英語表現は学習者にとって困難を感じる要素の多いことが理解できる。混乱をきたす学習者が多いのも無理はないものと思われる。

しかし、モノやカネの貸借は人間の基本的な活動のひとつであり、生きている限りは誰もが日常的に経験することである。それだけに、貸借表現をめぐる表現や動詞の使い分けは非常に重要なものであると言うことができる。本稿での考察が英語の貸借表現の本質の解明に

わずかでも資するところがあり、学習者の英語習得の一助となるならば、筆者としてそれ以上の喜びはない。

本稿の執筆に当たっては、松商学園短大の山添昌彦助教授（制度会計論）に貸借関係についての数々の有益な助言をいただき、論考を進める上で大いに参考にさせていただいた。この場をお借りして御礼申し上げたい。

注)

- 1) 'rent'が「貸す」と「借りる」の両方の意味に用いられることに関して、小島（1987:p.176）は次のように述べている。「有料の場合、『貸し』『借り』の区別がないのは馴れてしまえばネイティブ・スピーカーにとっては何でもないことで、特に不便はないと思われるが、区別する必要が生じた場合は、貸す場合に rent out のように out をつけることもある。」
- 2) 'rent'と似た意味を持つ語に'lease', 'hire'がある。これらの語は主に不動産などの有料の貸借について用いられるが、'rent'と同様に [GIVE 素性] と [GIVEN 素性] の両方を持つ。したがってこれらの語は基本的に'rent'と同類の語と考えられ、「貸す」意味と「借りる」意味の双方に用いられる理由も、本質的に等価交換を意味しているからだと考えることができる。
- 3) もちろん、カネを借りた場合には利息だけでなく元本も返済しなければならない。しかし「元本+利息」を返済するのは借りてから後になってからのことであり、カネを借りる場面においては、利息を伴う場合でも一方的な貸借の流れとなる。そういう意味で、これらの文は借りる場面のみ着手した言語表現だと考えることができる。

文 献

- 松本安弘・松本アイリン（1976）『あなたの英語診断辞書』北星堂
 小島義郎他編（1987）『現代人のための英語の常識百科』研究社
 小西友七編（1980）『英語基本動詞辞典』研究社
 Michael Swan (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press